どこからの警鐘ですか

真夏のある日、私は一人、キッチンでお昼ご飯の支度をしていたら、急にブレーカーが落ち、慌てた私はブレーカーを元にした。その時、「けいしょうです。」「けいしょうです。」と警報器から声がした。

その時、私は頭の中が真っ白になり、慌てて辞書を調べ、「けいしょう」が「警鐘」の意味だと確信した。なぜなら、「もし、問題がなかったら、警報器から声が出るわけがないだろう」と思ったのだ。それに加えて、昨晩、近所で火事があり、私の家の周囲まで煙で覆われたという記憶がまだ頭の中に鮮明に残っていた。だから、無意識に「すぐ大阪ガスに連絡しないと。」と思いついたのだ。

「もし、もし、先ほど家の警報器が鳴りました。どうしよう」と声を震わせながら私は言った。「で、警報器は何と言ったの。」と聞かれたとき、すぐ「けいしょうです」と答えると、相手は不思議そうな声で「もう一度お願いします。」と言い、「確かに警鐘かな」と返事した。受話器から従業員がいろいろ指示してくれたが、ドアと窓を開けることだけ聞き取れた。話の最後に、「すぐ私の家に見に来て欲しい」という私の切実な願いはなんとか通じたので、ほっとした。

従業員を待っている間、私は不安で、開けてあるドアのそばをふらふら歩き回っていた。１０分も経たないうちに、二人の従業員は重そうなケースを持って現れた。早速二人に警報器を見てもらった。電話をかけてから、ずっと警報器が鳴っていなかったので、従業員に「嘘を付いた」と疑われているかもしれないと、私は申し訳ないような複雑な気持ちになった。しかし、二人の従業員は文句も言わず、額から汗がしたたり落ちながらも黙々と点検し始めた。

「電動湯沸器とガス両方を同時に使って突然湯沸かしの方が自動的にオフになってしま

ってそして、ブレーカーも落ちたんですよ。」と私は告げた。「もう大丈夫です。」と伝えられた瞬間、安心したが好奇心でなぜ警報器が「けいしょうです。」と言ったのか従業員に尋ねた。

「初めて警報器を取り付けたら、その時、周りの環境を一回チェックして、もし正常やったら、一回声出して、正常ですと言うて、後はライトが緑になるんや。」と一人の従業員は言った。私は頷きながら、その落ちたブレーカーをあげた後、警報器が鳴ったことを思い出した。「ブレーカーが落ちたら警報器も電流がないやろ。そやから、ライトも何の色もないやろ。自分がブレーカーをあげたら、電流が流れるんで、ライトは緑になったやろ。その時、初めて取り付けた場合とおんなじように、警報器が周囲の環境をチェックして、正常ですと言ったんよ。」と流暢な和歌山弁で私に話した。「それで、警報器から出た声は警鐘ですではなく、正常ですということ？」私は不思議に思って聞いた。「そうなんですよ。」と言われた途端、顔から火が出るほど恥ずかしくなった。ニコニコしながら従業員は「もし何かあったら、警報器がガスが漏れていますとか言うはずやから、安心してくださいね。」と言って帰った。従業員の後ろ姿を見ていた私はピンと来た言葉が「警鐘」で、一体本当の警鐘は何だろう。

日本語の力はまだまだ足りないという警鐘でしょう。勉強すればするほど難しくなる日本語の勉強を、早く上手になりたい気持ちはあるが、なまけたりすることはしばしばで、やはり実践力は不足だと言えるでしょう。もう一つ考えさせられたことはいつも落ち着きがなくガサガサ動き回っている私は、日本人の従業員の働きぶりを見て勉強になった。今後は人生の警鐘に耳を傾ける必要があると思う。